

理解しにくい子どもたち

—— T 夫のこと ——

F · M

最近、理解しにくい子どもたちがふえてきているように思われる。T 夫も私にとって、そのような子どもの一人である。T 夫についてのエピソードは沢山あるが、そのどれもが、強烈な印象を残している。保育者としての私自身の驚きと、困惑、とまどいを、まざまざと思い出す。

四歳児クラスのことである。園庭に用意した「玉入れ」に気づいた子どもたちが、クラス、年齢を越えて入りまじって興じていた。T 夫も自分か

ら、その場に加わって投げっていたが、やがて手に持った玉を地面に力一杯投げつけて叫んだ。「はいらないじゃないか。もうやめたッ」 T 夫の目から涙があふれていた。

T 夫は、よく「かんしゃく」をおこす。自分で作ったピストルがこわれたと言っては怒り、みつからないといっっては怒る。片づけや帰りの時間も無視して、何か作っているので、「また明日しましようね」と言えば、やりかけのものを投げ捨てて怒る

し、私が他の子どもの求めに応じて忙しく、T夫の欲しがる材料をすぐに出してあげられないと、かんしゃくをおこす。あまりのかんしゃくぶりにあきれ、言いきかせようものなら、火に油を注ぐようなものである。

何がT夫に、このように、かんしゃくをおこさせるのであろうか。不思議に思いながら、とにかくできるだけ、かんしゃくを引き起こす情況をつくらないことと、「火に油を注ぐ」ことをしないように気をつけることにした。

年長組になって間もなく、帰りの時刻にいつものように、子どもを玄関で母親に渡した。いつもなら、靴をはきかえて、そのまま母親と帰途につくのであるが、この日、T夫は、見送っている私のところに靴を持ったまま戻ってきて、母親を目で探し、「いないじゃないか。せっかく靴を持ってきたのに」と叫んで、靴を床に投げつけた。靴を投げたことには取り合わず、「どこかしら」と私が見まわす

のと同時に、母親も気づいて戻ってきた。「ほら、いらしたじゃないの」私は何事もなかったかのようになり、T夫と母親を静かに見送った。「この頃、かんしゃくを一度もおこさない日があるようになりました」と母親に話した矢先の出来事であったが、かんしゃくは、以前よりずっと短かく、早く立ち直れるように思われた。

おべんとうのときも、T夫は私をとまどわせた。ほとんどの子どもが席についた頃、部屋に戻ってきて「すわるところがない」と言い、空席を示しても、黙って部屋の中をうろろ歩く。四歳も後半にはいつてのことである。「がまんして、あいている席の中から選んで腰かけるくらいことは、もうできるようになってほしい」という思いと、かんしゃくをおこさせたくないという思いのはざま、じつと耐えて待つ。T夫は、ちょっと間をおいてから「かめさんのところで食べよう」とつぶやく。観察用の生きものが置いてある机であるが、奥に寄せて

場所をあけると、T夫はかめの水槽の方を向き、他の子どもたちに背を向けて、おべんとうを食べた。

同じ情況が、再びおきたとき、T夫は、私の予想に反して、今度は床に正座して食事をするを選んだ。他の子どもたちがいすに腰かけ友だちと楽しく食事をする中で、一人床にすわって黙々と食べている姿は、何とも不可解なものであった。

年長組になってからの食事ときのトラブルは、少し様相が違っている。もうおべんとうをもって席に ついているY夫を、叩いたり、けったりしているT夫の姿に、私は驚いてとめにはいった。「どうしたの、どうしてYちゃんを叩くの？」と聞く私に、「Yちゃんのお隣で食べたいのに、だめだって言うんだ」と、なおも叩こうとする。並びたい子どもを痛めつけることに、少し不思議さを感じながら、Y夫のそばの空席を示し、「ここならYちゃんの近くだから、どうかしら？」と言ってみたが「隣じゃないきゃいやだ。もう、おべんとう食べない」と、プイ



と廊下に出て行った。T夫が、おべんとうを食べないで帰ることになっても、しかたがないだろうか。心を悩ませながら、時間にせかれて食事を始めた。やがてY夫の隣の子どもが食事を終って席を立った。「Tちゃん、Yちゃんのお隣あいたみたいよ。そこで食べたらどう？」と声をかけてみると、思いがけなく、T夫は素直に従った。これから食べ始めれば、T夫だけが遅くなる。それが又、かんしゃくの引き金にならないだろうか。私の恐れは杞憂であった。T夫は、ほどほどに食べて、皆と同じ

頃にさっさと片つけたのである。

T夫が変わってきたと感じられたのは、それよりひと月ばかり前の、五月の連休明けの頃である。T夫は地図のようなものをかき「いっしょに探検に行こうよ」と私を誘った。「いっしょにしよう」という誘いは初めてではなかったかと思う。次々と登園してくる子どもを迎えるのに忙しい私を、「早くしないとバスが出ちゃうよ」と言いながらも、T夫は根気よく待ってくれた。あとから数人の子どもが加わり、T夫が先に立って楽しいひとときがもてたことは幸いだった。

七夕の飾りつけのときのこと、誰かが作ったわつなぎの一部が取れたらしく、部屋に残されていた。居合わせた先生が、「Tちゃんのに、これもいっしょにつけたら」と言ったときT夫は険しい表情で、持っていた自分のわつなぎを床に投げ捨てた。しかし以前のような迫力は感じられなかった。「い

やだったら「つなげたくない」って言えばいいのよ」という私に、T夫は素直に「つなぎたくない」とつぶやいた。

T夫の一連のエピソードの中には、T夫の「思いこみの固さ」と「こだわりの強さ」があることに気づく。でも、なぜ……、どうしたら……。

一クラス三十三人の子どもたちの中で、一人ひとりの子どもの内にひそむ難しさに出会って、頭をかかえてしまう日々である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)